工藤晴子著（明石書店　2022年）『難民とセクシュアリティ　アメリカにおける性的マイノリティの包摂と排除』

永井萌子*

本書はセクシュアリティと人の移動を、アメリカの二都市、サンフランシスコ（ベイエリア）とニューヨークを対象に、クィア移住研究（Queer Migration Studies）の観点から論じた一冊である。セクシュアリティと人の移動は深く結びついている。この点が、本書にとどまらず、著者にとって一貫した問題意識であり続けてきたことは「まえがき」から窺える。その中でも本書は特に性的指向および性自認を申請根拠とする難民をめぐる包摂と排除について、アメリカにおける入国管理政策と、難民による語りの分析の2点から論じる。

本書は序章、第1章から第5章、そして終章で構成される。まず序章で研究対象が設定される。「LGBT（LGBTI, LGBTQI ＋）難民」や「クィア難民」など、性的指向および性自認を申請根拠とする難民の呼称には揺れがある。その中で筆者は「あるカテゴリーを言説的に構築することはひとまず避け」（19頁）、性的指向および性自認に基づく難民（申請者）を「性的マイノリティの難民」と呼び、その背景を「難民とはだれか」という根本的な問いからはじめて丁寧に論じる。

第1章では、セクシュアリティおよびジェンダーと人の移動を主軸に先行研究が整理され、クィア移住研究においてどのように入国管理政策、難民政策の議論が進み、性的マイノリティの難民という新たな対象へと研究の視座が広がっていったのかを知ることができる。その経緯は、世界大戦後の国際情勢を受けて成立した難民条約が男性を想定していたのに対し、女性や性的マイノリティが論点としてあがるようになった難民に関する議論の歴史と重なる部分が多い。一方で、「女性」や「性的マイノリティ」へのアプローチが特定の対象をラベリングし、本質化させてしまう作用を克服しきれていないことが指摘され、著者が「性的マイノリティの難民」という総称（16頁）を選択したことの背景が本章でより具体的に量り知ることができる。

第2章と第3章では、アメリカの入国管理政策における「性的マイノリティの難民」の包摂と排除が論じられる。まず第2章では移民管理のツールとしてのセクシュアリティに焦点が当てられる。入国管理における同性愛者排除のはじまる1952年から、入国禁止が取り除かれる1990年までの間にも、一貫した理由づけがあったわけではなく、社会背景とともに様々な排除の言説が用いられてきた。第3章では人権外交のツールとしてのセクシュアリティが論じられる。アメリカ社会は、人権外交を通じて「寛容」で「先進的」な姿を示すべく「LGBT」を移民・難民政策の中に包摂していくようになっていく。

第4章と第5章では、著者が2009年から2014年にかけて二都市で行った調査に基づき、「性的マイノリティの難民」のナラティブ分析を通じた包摂と排除の構造が論じられる。第4章では、調査協力者がナラティブを構築していく過程で、制度の中で「『勝てる』ストーリー」（152頁）を獲得し、包摂、つまり難民認定を獲得するまでの道のりが示される。一方で第5章では調査協力者の語りの複層性へと焦点が移る。前章でみた構築された語りとは、裏返せば、不必要と判断された箇所が無駄なく削ぎ落とされたストーリーであり、本章ではそれを複雑な「生きられた生」に再び戻って分析が行われる。アメリカに庇護を受けるべきLGBTとしての語りの構築が難民に包摂の機会をもたらす一方で、一枚岩的な

*お茶の水女子大学　人間文化創成科学研究科

DOI：10.24567/0002003775

「LGBT」像には決して当てはまりきらないかれらの複層性が排除の経験にもつながっている様子が浮き彫りにされる。

終章で筆者は今後の課題として、1）調査を終えた2014年以降のアメリカ社会の変化を踏まえたさらなる検討、2）支援側と被支援側の権力関係が難民の経験に及ぼす影響に関する検討の2点を挙げ、本書を締めくくる。

管見の限り「性的マイノリティの難民」について検討されたものは国内では本書が一冊目である。しかし、本書の意義は、日本のクィア移住研究、難民・強制移動研究における一つのターニングポイントとして今後参照されるであろうということに終わらない。

例えば本書のナラティブ分析もその一つである。国際的にも「性的マイノリティの難民」研究でここまで丁寧にナラティブが分析された研究は僅かであるだけでなく、著者は、難民は「支配的な言説に従わざるをえない」（150頁）と結論づけてきた先行研究を乗り越えようと試みる。審査側が、抑圧された自由を求める人とまなざす、まさにその難民が、アメリカの方式を習得し、アメリカが国内外で発信してきた言説を逆手にとって利用する。支配社会にある資源を掴み取り、自らの生き残る戦術として実践するかれらのナラティブ構築は確かに「クィアな抵抗の可能性」（54頁）と呼ぶに相応しい。この点に辿り着いた本書の分析は「性的マイノリティの難民」研究の中でも特別で、興味深い。

最後に、本書が示唆する更なる議論の可能性について、筆者が終章で挙げた点の他に2点提示したい。1点目は、調査フィールドとナラティブ分析についてである。「性的マイノリティの難民」を主題とする本書が、議論の足掛かりとしてアメリカをフィールドに選択したことはある意味で必然である。この点は感覚的に理解している人も多いだろうし、本書を読めばさらにクリアになる。一方でこのように捉える（ことができる）のは、特定の都市を想定しているからなのだろうか。難民審査過程を見ていく上でローカリティへの視点は不可欠である。

本書は国内でも「アイコン的な『LGBTコミュニティ』が存在する」（23頁）都市として知られるサンフランシスコとニューヨークを選択している。フィールド設定の理由は明示されるものの、「性的マイノリティの難民」に関してこの二都市が国内でどのような立場にあったのか、また二都市の特徴と語りの分析がどこまで連関していたのかに関する考察には議論の余地があるだろう。またアメリカが選択されたことの必然性は同時にアメリカの特殊性とも言い換えられるだろうが、それはあくまで都市的なものなのだろうか、他の地域ではなにがみられるだろうか。

2点目は「性的マイノリティの難民」の内部の複層性に関わる。「性的マイノリティの難民」研究は、蓋を開けてみると「シス男性同性愛難民」研究だったということが少なくない。そのような中で著者は54名の調査協力者のうち14名もの女性から話を聞いている。当然、筆者の意図があってのことだということは推察できるものの、本書では、例えば「ゲイ」であることと「レズビアン」であることが少なからず平坦に論じられてはいないだろうか。第5章で言及されたインターセクショナリティの視点から考えられるように、調査協力者の語りが示唆する「クィアな抵抗の可能性」は決してすべての難民に等しく開かれたものではないだろう。

本書はセクシュアリティと人の移動をめぐり、我々に多くの議論の新たな可能性と方向性を示唆してくれている。本書から得られる知見は日本における「性的マイノリティの難民」の議論の更なる発展を後押しすることになるだろう。